

絵図からみる今出川キャンパス

キャンパスめぐり隊	富田 知恵子【とみだ・ちえこ】
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

今回のキャンパスめぐり隊では、近世後期から明治時代前期ごろに作成された絵図を用いて、同志社今出川キャンパスの現在と昔を見ていきたいと思います。絵図を見て、実際にキャンパスを歩いていただき、１８７５（明治８）年に開校した同志社英学校が、現在の形になるまでの大きな流れを体感していただければ、と考えております。

さて、１８７５年11月29日に同志社英学校が開校しますが、それは今出川キャンパスではなく、現在、新島旧邸が建つ場所においてでした。新島旧邸は同志社の創立者たる新島襄が家族と暮らした家で、御苑の東側に寺町通りに面して建てられています。旧邸は１８７８（明治11）年に建てられますが、それ以前には、華族の高松保実が居住する建物があり、同志社英学校は、その建物を借りて仮開校しました。

翌年９月に校舎２棟（第一寮・第二寮）と食堂が建てられた今出川キャンパスの地に、同志社英学校は移転します。学校が移転する前の今出川キャンパスの様子はどんなものであったのでしょうか。

絵図について

ここから絵図を見ていただきますが、①の絵図は１８９０（明治23）年に同志社で作成されたものです。この年は新島襄が亡くなった年で、同志社所有の土地、建物の整理調査がされました。その時に作成された絵図ですので、絵図を見る対象は同志社関係者など限られた人です。

それに対して、②以降の絵図は出版され、一般に販売されたものです。近代になると、縮尺によって地表を正確に描き、記号などの図式を明示した地図が出版され、「近代地図」と称されたりしますが、資料に掲載した図は、縮尺や図式によって描かれたものではありません。そうした地図を「古地図」ともいいますが、今回は馴染み深い「絵図」という言葉を使わせていただきます。

ここに載せている絵図は、いずれも約50×60cm以上ある大きな絵図のうちの今出川キャンパス部分のみをクローズアップしたものです。全体図につきましては、②～⑥は国際日本文化研究センターの地図データベースで画像が公開されています。①につきましては、全体を２分割された画像になりますが、新島遺品庫データベースで見られますので、よろしければご覧ください。

さて、こうした前提を踏まえて絵図を見てまいります。まず、②は１８１２（文化９）年に作成された「京都指掌圖」という絵図です。真ん中に「相国寺」と書かれており、その南側に「二本松」とある辺りが現在の今出川キャンパス付近です。ここには何も描かれておりませんが、相国寺の寺地だったようです。③の１８６４（元治元）年になりますと、「薩州屋敷」の文字が出てまいります。１８６２（文久２）年に薩摩藩の藩邸が相国寺の寺地を借り受けて建てられていました。

１８７１（明治４）年、上知令という法令が出され、寺社の領地が政府によって没収されますが、相国寺も、かなりの土地を召上げられました。相国寺が薩摩藩に貸していた土地も寺へ返還された後、没収され、その後、薩摩藩士の手に移ったようですが、それから今出川キャンパスの地がどのような変遷を経て同志社の所有となったのかは、実は、はっきりしておりません。新島襄の妻、八重の兄である山本覚馬から譲渡されたとも言われており、山本覚馬が土地の所有になんらかの関係をしていたのかもしれませんが。

さて、先ほども申しましたように、今出川キャンパスには１８７６（明治９）年９月に校舎と食堂が建てられ、英学校が移転してまいります。①の明細図を見ていただきますと、濃い色の部分が同志社の土地になりますが、２つの校舎と食堂は１８９０（明治23）年には、まだ描かれています。

④の絵図は、同志社英学校が移転したばかりの１８７６（明治９）年に発行されたものですが、すでに「英学校」の記載があります。⑤は１８７９（明治12）年発行ですが、こちらには絵入りで記載されています。最初に建てられた校舎や食堂はキャンパス地の東側部分なのですが、「英学校」の表示は、いずれも西側部分に記されています。

絵図は、正確を期したものではありませんが、当時の人々や絵図の発行者の空間認識というものがあると思われます。同志社英学校も、この辺り、と認識されていたのではないかと思います。

ルートについて

それでは、これからキャンパスをめぐってまいります。ルート図に矢印で示されているルートを歩きます。なお、図、絵図はすべて北を上にしてあります。まず、彰栄館、礼拝堂、ハリス理化学館、クラーク記念館をめぐりますが、この辺りは明治17年から20年代に西から東へ建物を建てていったゾーンになります。

その後、向かうのが大正時代に展開していったキャンパス東側のゾーンです。相国寺門前から今出川御門につながる門前通りを挟んだこの辺りには、当時の図書館であった啓明館や致遠館などの建物が建てられていきました。

そして、弘風館の中を通り、明德館と冷泉家の間を抜け、図書館南側をまわって礼拝堂へ戻ります。この辺りは昭和に入り、学生の増加にともなう教室不足解消のために旧校舎を壊して大教室を備えた建物が建てられていきました。それでは、まいりましょう。

キャンパスを歩く

まず、彰栄館ですが、１８８４（明治17）年に建てられた同志社キャンパスで初めての煉瓦建築です。現在、彰栄館の前には通称パーパスロードと呼ばれる通りが東西にのびています。この通りは、①「同志社所有地明細図」の中央を走る街路にあたります。石橋通りと呼ばれていたようです。絵図が描かれた１８９０年当時、今出川キャンパスはこのパーパスロードより北側部分と、南側の「図書館」と書かれた建物（現在の有終館）付近、そして相国寺門前通りを挟んだ寮が建つ東側部分、という範囲でした。

彰栄館の東側に建つ礼拝堂は、１８８６（明治19）年竣工です。新島襄は、竣工前年に行われた定礎式で「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者ナレバナリ」（『新島襄全集』１ 教育編 同朋舎 １９８３年）と述べています。キリスト教主義の同志社にあって、この礼拝堂は同志社の心臓ともいべき部分であったことが、この言葉からもわかります。次に建てられたのは１８８７（明治20）年開館の有終館ですが、こちらは少し離れたキャンパス南側にありますので、後ほど御覧ください。

その次に１８９０（明治23）年に建てられるのがハリス理化学館です。理化学館は、外側と階段部分が重要文化財に指定されており、中はギャラリーなどになっています。創設時の名称は「ハリス理化学校」で、近代的な理化学教育機関としては京都でも早い時期に設置されました。

次に見える建物は、クラーク記念館です。１８９４（明治27）年に開館した当初は、「クラーク神学館」という名称でしたが、１９６３（昭和38）年南側に新たに神学館が建てられるのにともない、「クラーク記念館」と改称し、内部を中心に改修が行われました。さらに２００３（平成15）年から２００７（平成19）年にかけて半解体修理工事が行われ、内部や屋根を中心とした復原工事も実施されました。この工事によって建物は、当初により近い姿となっています。

クラーク記念館の北側に建つ、この建物は寒梅軒というお茶室です。この茶室は二条家ゆかりの建物です。

ここで、１８７６（明治９）年の絵図④と１８７９（明治12）年の絵図⑤を見ていただきますが、この２つの絵図で記載の違うところは、キャンパス東側（絵図右側部分）、現在の女子部の辺りですが、④では「二條殿」と書かれているのに⑤では「舊（旧）二條殿」とされているところです。

この辺りには、五摂家の一つである二条家の屋敷が17世紀からありました。その土地の一部を１８７７（明治10）年に同志社が取得して女学校の敷地としました。ですので、この⑤絵図が出版された１８７９（明治12）年には、すでに同志社女学校があるはずなのですが、「同志社女学校」と記載されず「舊二條殿」と記されています。当時、二条家の建物もまだ残っており、その土地が二条家のものであったという印象が強かったからと考えられます。

戦後、同志社は残りの土地建物を取得します。元二条家の建物は、同志社女子専門学校の寄宿舎「銅駝寮」として使用された後、売却され、１９５９（昭和34）年に大阪の寺院へ移築されます。

二条邸には茶室があり、１９５４（昭和29）年に今出川キャンパスの現在の図書館辺りに移築されましたが、図書館建築にともない、さらにクラーク記念館の北東に移されました。これが寒梅軒です。当初の姿から少し変わっておりますが、二条家の香りを残す建物です。

クラーク記念館をぐるりとまわりまして、第一寮跡の石碑、第二寮の石碑があります。礼拝堂でお話しましたように、今出川キャンパスに最初に建てられた建物の跡です。この辺りに建てられました。

神学館の横を通って東側に見えるのが啓明館です。啓明館は、まず１９１５（大正４）年に北側の建物が建てられ、１９２０（大正９）年に南側の本館と西側の２階建ての渡り廊下が増築されました。資料の写真⑧は、この本館が建てられたころのものです。設計はヴォーリス建築事務所です。１９５７（昭和32）年にさらに東側の人文科学研究所書庫が増設され、現在は口の字型の建物となっています。登録有形文化財に指定されていますが、１９５７（昭和32）年に増設された部分を除いた建物が登録部分です。

啓明館と門前通りを挟んで建っている建物が、致遠館です。２０２１（令和３）年に建て替えが完了しましたが旧建物はヴォーリス建築事務所設計といわれています。南側に見える建物が有終館です。先ほどお話したように１８８７年（明治20年）に開館しました。①の絵図の中央よりやや右下に「図書館」と書かれているように有終館は初代図書館で、当初は書籍館と呼ばれていました。１９２８（昭和3）年に火災にあい、内部からコンクリートで補強したため、重要文化財指定は外壁のみです。

さて、こちらは弘風館という建物ですが、まず、１９５７（昭和32）年に北側半分が建てられ、その後、南側半分を増設、１９５９年に現在のような姿となりました。写真⑤は北側半分のみの状態の時のものです。この入口より北側部分が、まず建てられました。写真左奥に少し見える木造の建物は初代弘風館で、初代と２代目弘風館が並ぶ珍しい写真となっています。初代弘風館は、南側部分の増設時に現在の図書館付近に移転され、自修館と呼ばれることになります。

それでは弘風館の中を通り、東側へ抜けて明徳館の南側を通ります。南側の堀の向こうは冷泉家になりますが、この明徳館と冷泉家の間の辺りが①「同志社所有地明細図」に見られる石橋通りの南側を東西に通っていた小路にあたります。

１９１７（大正６）年、市電の敷設による今出川通りの拡幅のため、キャンパスの今出川通りに面した敷地は削られることになります。同志社は相国寺門前通りを整理し、さらに石橋通りおよび小路の半分と、削られたキャンパス敷地を京都市と土地交換しております。これにより石橋通り、小路部分もキャンパス地となりました。

そして、こちらの門が旧華族会館の門です。⑥「改正新刻京都區組分名所新圖」を見ますと、英学校の南側に「華族会館」という文字が見られます。華族会館は、明治維新後、華族制度が設けられた後、１８７４（明治７）年に東京で創設された団体です。同年、京都でも御所の乾御門内旧一条邸において集会所が設けられ、翌明治８年に東京の華族会館と合併、華族会館京都分局と呼ばれます。

京都分局は旧閑院宮邸、宝鏡寺などに移転を繰り返した後、１８７９（明治12）年に、今出川キャンパスの現在図書館がある場所に建っていた旧徳大寺家の屋敷に落ち着きました。翌年１月から増改築が行われ、旧閑院宮邸の表門と玄関の車寄が移築されました。この移築された表門が、現在大学院門と呼ばれているこの門です。車寄には、１８６７（慶応３）年の獅子口が晝（ひ）かれています。１８６４（元治元）年におこった蛤御門の変で閑院宮は焼けており、その後に建てられたものが移築されたようです。

華族会館は、戦後、華族制度の廃止により「霞（かすみ）会館」と改称され、１９４６（昭和21）年に建物がアメリカ進駐軍に接収されたため、組織は大聖寺へと移ります。１９５２（昭和27）年に同志社が購入し、接収解除された後、大学院の授業を行った建物なので、その前に建てられた門は大学院門と呼ばれるに至ります。「啓真館」と呼ばれたこの建物は１９７２（昭和47）年に現在の図書館建築にともない、解体されました。現在は、このように車寄飾金具と獅子口、そして啓真館に飾られていた銘額（１９５９年書）が残されています。

以上、駆け足で申し訳ありませんでしたが、案内を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【参考文献】

大久保利泰『霞会館「京都支所」のあゆみ』 社団法人 霞会館 ２０１０年

京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財同志社彰栄館修理工事報告書』 京都府教育委員会 １９８１年

京都府教育庁指導部文化財保護課編集『重要文化財同志社礼拝堂修理工事報告書』 京都府教育委員会 １９９０年

京都府教育委員会編『重要文化財同志社クラーク記念館修理工事報告書』 京都府教育庁指導部文化財保護課 ２００８年

認定ＮＰＯ法人古材文化の会編集『同志社大学致遠館調査報告書』 同志社大学同志社社史資料センター ２０２０年

２０２２年６月10日 同志社スピリット・ウィーク春学期

今出川校地「キャンパスめぐり隊」記録

※図の表示はホームページでは省略します。